

『リスクコミ職能教育を目指す 新カリキュラム』試行

開講日 ①2017年1月21日(土:9:45~16:20) ②1月22日(日:9:30~16:30)
会場 北海道大学農学部食資源研究棟 F319
主催者 リスクコミ職能教育プロジェクト(文科省補助事業平成26年度採択)

【目的】平成29年度の後期に開講を予定している「新カリキュラム～リスクとリスクコミュニケーション問題～(仮)」に先立ち、その試行版を開講することによって得られる諸課題を集約検討し、本開講版に反映させる。

【新カリキュラムの目的】

1. 各自の専門性を尊重した上で、職能として身につけてほしいリスクコミュニケーション能力を、座学と実習二つの側面から涵養する
 - 1) 媒介者として聴く耳を持つ
 - ・関与者間の情報の交換を含む応答の調整
 - ・ファシリテーターの役割を尊重
 - 2) リスク問題を多様な視点から検討できる
 - ・多様な視点を持つ
 - ・ファシリテーターの立場になった際に、多様な視点を活かす
 - ・リスクミをする上でカギとなる要素を盛り込んだ企画ができる
2. 大学と社会の各層との協働でリスクコミュニケーションの場を創出することで、人々に対しより良いリスクコミュニケーションの場を提供する。
(試行開講では企画案作成まで)

【内容】座学 講義1「知識1 リスクと社会」
講義2「知識2 リスクコミュニケーションの課題」
リスクコミュニケーションの事例説明
講義3「現場1 BSE 評価と管理の間のリスクコミュニケーション」
講義4「現場2 食品と放射能 求める情報/出したい情報」
講義5「現場3 対話の場面～ファシリテーターの役割/参加」
実習 グループワーク「リスクコミュニケーションの企画案づくり」

【お願い】

- ・講義1～4では、講義とQ&Aが終わった後に10分ほどの時間を残しますので、この時間内に忌憚のないご感想やご意見等を用紙に書き込んでください。
- ・1度集めてから、その日のうちに、皆様方にお返し致します。

【お願い オブザーバー参加の方に(※)】

- ・ぜひとも、グループワークに入っていただくようお願いいたします。



— プログラム —

1. 第一日 (9:45~16:20) 基本知識・実習 I

講義を受け、各グループで「よりよいリスクミ」のあり方について討論し企画案を作成する

開講式 (9:45~10:00)

趣旨説明 (5分)

参加者の自己紹介 (10分)

第1講 (10:00~11:25, 85分) 講義1 三上直之 [社会学の視点]

【知識1】「リスクと社会～いま、社会の文脈の中で」

聴く<講義とQ&A (75分)> 書く<感想や意見等 (10分)>

～休憩 (5分)～

第2講 (11:30~12:40, 70分) 講義2 吉田省子 [科学史の視点]

【知識2】「リスクコミュニケーションの歴史と課題～リスクガバナンスへと」

聴く<講義とQ&A (60分)> 書く<感想や意見等 (10分)>

～ランチタイム (12:40~13:40, 60分)～

第3講 (13:40~14:15, 35分) リスクコミュニケーションの事例説明

様々なリスクコミュニケーションの試みと場作りのモデルケース

～ 休憩 (10分) ～

第4講 (14:25~16:15, 110分) 実習 I グループワーク

4-1 (14:25~16:05, 100分)

実習の説明 (5分)

グループワーク (95分)

食・農分野からテーマや対象を設定し、リスクミの企画案をつくる

<企画案に示す項目>

- ① グループ名紹介
 - ② テーマ (選定理由にふれる)
 - ③ リスクミの目的
 - ④ 想定されるアクター
 - ⑤ リスクミの形式 (当日プログラム等)
 - ⑥ 工夫など
- その他, 自由に設定

4-2 (16:05~16:15, 10分)

共有 (1グループ×3分)

1日目挨拶と講評 (16:15~16:20)

第1グループ

岡崎 朱実
竹田 宜人
奈良 英代
小山 里美
山際 睦代

第2グループ

日比 幸人
石丸 智弥
吉田 陽子
芦澤 万里音
磯田 典和 (※)

第3グループ

伏見 和弘
西野 佳奈
竹田 佳代
棚橋 知春
松永 陽子+1名

2. 第二日 (9:30~16:30) 現場を知る・実習Ⅱ

現場からの問題提起を受け止め、実習Ⅰの企画案を再考し完成させる。

第1講 (9:30~10:55, 85分) 講義3 門平睦代 [疫学の視点]

【現場1ーリスク評価の次元】 専門家と行政

「リスク評価とリスク管理の間で〜リスクコミとBSE問題〜」

聴く<講義とQ&A (75分)> 書く<感想や意見等 (10分)>

~休憩 (5分) ~

第2講 (11:00~12:25, 85分) 講義4 小山良太 [農業経済学の視点]

【現場2ーリスク管理とリスクコミの次元】 国・科学者・市民間のズレ

「食品と放射能：すれ違う現場〜求める情報/出したい情報」

聴く<講義とQ&A (75分)> 書く<感想や意見等 (10分)>

~ ランチタイム (12:25~13:15, 50分) ~

第3講 (13:15~14:00, 45分) 講義5 ファシリテーション研究会 [場の雰囲気]

【現場3ー対話の場面の次元】

「ファシリテーターの役割と課題」「参加者の満足度」

担当) (渡邊瑞穂/明田川知美/竹内琳加) 質問随時

~以降、休憩は各自で随時おとりください~

第4講 実習Ⅱ グループワーク & 発表

4-1 (14:00~15:00, 60分)

グループワーク (前日の企画案を完成させ、発表準備をする) (60分)

~休憩 (5分) ~

4-2 (15:05~16:20, 75分)

発表 (発表&質疑: 1グループ×15分) (60分)

感想共有 (ポストイットに感想を書き貼りだす) (15分)

閉講式 (16:20~16:25)

小林講評と挨拶 (5分)

アンケート (~16:30)

第1グループ

岡崎 朱実
竹田 宜人
奈良 英代
小山 里美
熊谷 利恵子

第2グループ

日比 幸人
石丸 智弥
吉田 陽子
芦澤 万里音
磯田 典和 (※)

第3グループ

伏見 和弘
西野 佳奈
竹田 佳代
棚橋 知春
丸子 剛史 (※)+1名

【リスコミ】 リスクコミュニケーションの短縮形。

【リスクコミュニケーション】

リスクに関するコミュニケーションですが、この数十年で意味合いが変化し、しかも分野ごとに少しずつ違った意味合いを帯びています。文部科学省審議会ですとまとめた『リスクコミュニケーションの推進方策』では、「リスクのより適切なマネジメントのために、社会の各層が対話・共考・協働を通じて、多様な情報及び見方の共有を図る活動」となっています。

早くからリスクコミュニケーションに取り組んだ木下富男によれば、「リスク場面において、関係者間の信頼に基づき、また信頼を醸成するためのコミュニケーション」であり、「リスクに対する情報をステークホルダーに対して可能な限り開示し、互いに共考することによって、解決に導く道筋を探る思想と技術」ということになります。

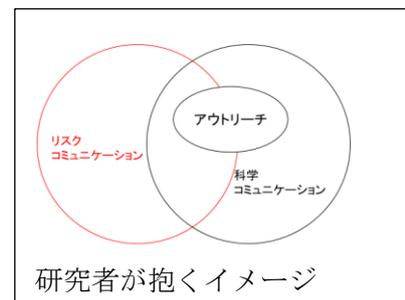
【ステークホルダー】 利害関係者、あるいは関与者という言葉があてはまる。

リスクコミュニケーションは広報や宣伝ではありませんが、企業では広報担当の方達がリスクコミュニケーションに関心を持っています。専門家が関わるコミュニケーション活動として、アウトリーチと科学コミュニケーションが似ているかもしれません。しかし、リスクコミュニケーションをされる側にとって、新しい知識や正しい情報を得られる場でもありますから、そういった人々の中には、学習会とどう違うのかと問いかけてこられる方もおられます。

【アウトリーチ】

研究者と国民が互いに対話しながら、国民のニーズを研究者等が共有するための双方向的リスクコミュニケーションの活動。

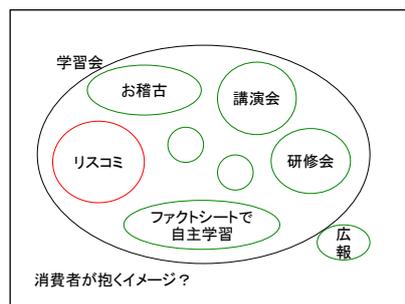
(平成 22 年 科学技術白書 第 1 部 第 3 章)



研究者が抱くイメージ

【科学コミュニケーション】

国会、政府をはじめ研究機関、教育機関、学協会、科学館、企業、NPO などの団体、研究者・技術者、国民・住民等の個人間で交わされている科学・技術に関するコミュニケーション活動で、サイエンスカフェからコンセンサス会議まで、非常に幅広い内容を包含している。(平成 23 年 科学技術白書 第 2 章)



消費者が抱くイメージ?

科学コミュニケーションは、科学技術の営みや知識そのものが伝達の中心となる、平時のコミュニケーション活動です。それに対し、リスクコミュニケーションは、問題の中心はリスクであり、未来のいつかの時点で起こり得る損害についての見通しや対策を行うための、有事に備え平時に行うコミュニケーション活動です。

また、クライシスコミュニケーションは、有事の状況で行うコミュニケーションです。

皆さんが抱くイメージ

【ファシリテーター】

グループワークのファシリテーターは、単なる司会進行役でもまとめ役でもなく、議論の進行役です。具体的には、グループの議論の流れやプロセスを管理することと、議論している内容について中立の立場（※）を保つことです。

フラン・リースはファシリテーターの役割を、こう書いています（抜粋）。

1. 内容に対しては中立の立場を貫く
 2. 参加意欲を引き出す
 3. 発言者が偏らないよう配慮する
 4. メンバー同士の話し合いを促す
 5. グループ作業に適した体制とプロセスを提案する
 6. 人の話を積極的に聴き、他のメンバーにもそうするように求める
 7. 意見の相違を歓迎する
 8. メンバーの発言を記録し、整理し、要約する
（これは、ファシリテーターではなくグラフィッカーもしくは記録者の役割かもしれません）
-

※ファシリテーターの孤独（Yさんに聞きました）

中立性（1）はとても緊張を強いられます。専門家と市民が向き合う時などは、知識量のパワーバランスを考えると、軸足は市民側に預けておいた方が良いと思われれます。また、公平性（3）を実現させるために、グループファシリテーターが苦勞をしているのをつぶさに観察してきました。その経験から言うと、公平性を追求するあまり、ぎくしゃくしてしまう話し合いになってしまうより、厳密に発言時間を制限しない方がいい場合もあるなあと、思ったこともありました。悩ましいところです。

2011年秋に、市民陪審の手法を使った「GM どうみん議会」でファシリテーターを務めたことがあります。まとめの議論に入っていったとき、議論は白熱し、いい感じになっておりました。と、そこで参加者に、中立な場ではないのではないかと批判されました。情報提供を求めた専門家の中に「批判的な人」がいなかったのが、反対の意見を持つ専門家も招くべきだったというのです。確かに「戦闘的な」反対派の専門家と言われる人はいませんでした（日程の都合がつかなかっただけ）が、慎重派を選したので大丈夫と楽観していました。それが通じず、終盤に向かう中、募る孤独感に、足が一瞬ふらつきました。

【文献】

1. 『リスクコミュニケーション論』
平川 秀幸／土田 昭司／土屋 智子、大阪大学出版会（2011年）
2. 『リスク・コミュニケーションの思想と技術』
木下 富男、ナカニシヤ出版（2016年）
3. Ortwin Renn, *Risk Governance : Coping with Uncertainty in a Complex World*, Earthscan (2008)
4. 『科学コミュニケーション案内』JST 科学コミュニケーションセンター
https://www.jst.go.jp/csc/archive/pdf/brochure_01.pdf
5. 『オープン・スペース・テクノロジー』
ハリソン・オーエン、ヒューマンバリュー（2007年）
6. 『ファシリテーター型リーダーの時代』
フラン・リース、プレジデント社（2002年）